今日のコンサートの主人公は、１台のピアノです。

昭和４年、当時としては大変珍しいドイツのフッペル社製のグランドピアノが、海を越え、大正尋常高等小学校に入ってきました。その購入費は、４，０００円。当時、新築されたばかりの２階建小学校の建築費が１５，４２０円であったという記録が残っていますので、いかに高価なピアノであったかということが、お分かりいただけると思います。（購入経緯など、全く不明であったピアノですが、平成１９年に開催したコンサートの後、大阪在住の開業医、故田中正慶氏（矢戸出身）が、母校の校舎新築記念として、匿名で寄贈されたものであることが判りました。）

導入当時は、グランドピアノを弾ける先生も少なかったようですが、昭和１０年代に入るとピアノを弾ける先生も増え、郡内ではあまり例のない、華やかな音に満ちた音楽の授業が実施されたといいます。

そうした中、昭和１６年１２月８日、太平洋戦争が勃発、多くの大正尋常高等小学校の卒業生が、戦地に赴きました。また、戦争末期には、教職員の徴兵猶予もなくなり、出征される先生も出てきました。日野上国民学校の訓導、梅林彊輔先生もその中の一人でした。昭和１９年５月１３日、梅林先生は、出征に当たっての思いを「感激の征途」という６節の長編の詩に託されました。その詩に、同僚の田辺重雄先生が曲をつけられ、二人はピアノを囲んで弾き、歌い、５月１５日、梅林彊輔先生は出征されました。広島県大竹海兵団で３ヶ月の新兵訓練の後、戦艦大和の乗組員となられた梅林先生は、平成２０年４月、沖縄方面特攻作戦に出撃、不沈戦艦と言われた大和ともに運命を共にされ、帰らぬ人となられました。２２歳と１ヶ月という若さでした。

また、フッペルのピアノで音楽の授業を受け、大正尋常高等小学校を卒業、そして出征され、戦死された方は７３人。みんな若い青年でした。１５歳で戦死された少年兵もいます。

今日のステージの中央に立つのは、そんな哀しいエピソードを奏でてきた１台のピアノです。

フッペル社製のグランンドピアノは、現在、日本に３台しかないと言われています。

その内の１台、佐賀県鳥栖小学校にあったピアノにも、悲しい戦争のエピソードがありました。出撃前の最期の思い出にと、鳥栖国民学校のピアノでベートーヴェンの「月光」の曲を弾き、戦死した若き特攻隊員のその実話は、「月光の夏」という映画にもなりましたので、ご存知の方も多いと思います。ただ、日南と鳥栖に、いずれも戦争にまつわる悲話をもつフッペルのピアノが現存するということに大きな因縁を感じます。

そして、もうひとつ、意外なところで関わりのある事が判明しました。実は、鳥栖国民学校のフッペルで「月光」の曲を弾き、出撃した特攻隊員のうちのおひとりは、搭乗機のエンジン不調の為、敵艦に突入出来ず、引き返され、そして、終戦を迎えておられます。その方のお名前は、柴田了一さん。復員後は、山梨大学教育学部の音楽の教授として、平成１０年に亡くなられるまで、教員養成に生涯を捧げておられます。

一方、故梅林彊輔先生は、鳥取師範学校時代、日南町阿毘縁出身の木村信之先生とペアを組まれ、神宮で開催された軟式庭球全国大会に出場されているのですが、ペアの木村先生が、柴田先生とご交流があったのだそうです。柴田先生、木村先生、お二人とも東京音楽学校のご卒業で、柴田先生が２年先輩となります。柴田先生は山梨大学へ、木村先生は東京学芸大学へ、教える場所は違っても、音楽を通じてのご交流はずっと続いたということです。ここでも、日南と鳥栖が繋がりました。偶然という言葉だけでは片付けることのできない不思議な縁を感じます。

今日のステージで、フッペルのピアノは、どんなドラマを奏でるのでしょうか。

…さあ、舞台の幕があがります。